

## 「嘘の衰退」の嘘について

木村克彦

(作新学院大学助教授)

「嘘の衰退」には、人生および芸術において、あらゆる瞬間に、また、あらゆる場面で、「逆説」、「パラドックス」が、成立してしまうことへの、ワイルドの「驚き」が込められているような気がしてならない。それは、もう殆んど「嘘」のように思えた位に。

「嘘の衰退」に数年先立つアメリカ講演においては未だ、ワイルドは、パラドックスを連発して語るようなスタイルとはってはいない。リチャード・エルマンも次のように言う。

ワイルドは、「ペン、鉛筆と毒薬」と「嘘の衰退」の二つのエッセイ、特に後者で、自己の天才を発見したのだ。

かつて私は拙論「『嘘の衰退』試論」において、「嘘の衰退」そのものが「嘘」であるとした。例えばワイルドは、「嘘の衰退」冒頭において、まず次のように「自然」を蔑視してみせる。

私自身の経験だと、「芸術」を研究すればするほど、「自然」のことなどどうだってよくなるんだ。

しかしながら、『ラヴェンナ』をはじめとしたいくつかの詩、あるいは、童話のなかの数カ所などを読めば、ワイルドが、十分に自然の美も認めていたことは、容易に首肯し得る。したがって、前掲の「嘘の衰退」の言葉は、ある意味でと限定しても良いが、ワイルドの「嘘」ともとれよう。そしてワイルドがこの「嘘」を更に敷衍し、次の有名な警句が生まれたと言って、差し支えないのではあるまいか。

……外界の「自然」もまた「芸術」を模倣する。

ここでワイルドは、「自然」を「芸術」よりも低位に置いているかに見える。しかし、私たちが、自然が描かれた芸術から発見するものは、その芸術が優れたものである場合に

は、とりあえず、その芸術自体の素晴らしさであろう。それを生み出した芸術家への、讃嘆や敬意の念であろう……しかしながら反面、それほど優れた芸術家に、それほどの創作意欲をかきたてるところの、他ならぬ「自然」の偉大さと、その美にも、私たちは改めて驚かざるを得ないのではないだろうか。即ちそれは「自然」の再発見と言っても良い。また仮に、その芸術が拙い芸術であった場合……その場合でも私たちは、拙い芸術家をはねのける「自然」の偉大さを、ますます強く、認識する場合もあるのではないか。即ち、パラドキシカルな言い方であるが、芸術家が偉大であろうがなかろうが、彼らが対峙するときの「自然」は敵として動かず、ますます偉大なものとして写ってくるのではないか……またそのように写ってくる時、私たちは、芸術と自然の関係を等閑にしてしまうよりは、真理（なるものがあればの話だが）に幾分かでも近づくことになるのではないか。そしてとりまなおさず、その真理へと肉迫する方法、またその方法を表現するスタイルが、ワイルドの場合、「パラドックス」に他ならなかったのである。それ故、ワイルドの主張するところのものは、その殆んどが（一見）、「嘘」であると言うこともできよう。何となればワイルドが何を言おうと、「その逆もまた真なり」であるからである。ワイルドは、自らの芸術論を展開するにあたり、真理へと近づくのにパラドックスをもってした、あるいは、パラドックスをもってするより他には方法がなかった。しかしそれがパラドックスである以上、その逆もまた成立してしまい、それ故に、一方の側だけから見れば、それは「嘘」ということになってしまった。即ち「嘘の衰退」における「嘘」とは、ワイルドが口先でひねり出した嘘ではなく、ワイルドにとって、この現し世そのものが、「嘘」のように思えたということではないだろうか。これもやはり、以前に拙論で述べたことではあるが、『まじめが大切』が「美しい嘘」であるのに対し、ワイルドにとって、彼の特に晩年の実人生は「美しくない嘘」のように思えたことであろう。芸術のみならず、私たちの人生そのものも、「嘘」（のよななもの）なのである。即ち、「嘘の衰退」は、あるいは「嘘の衰退」も、下手な芸術に対する嘆きなどと言うよりも、人生そのものへの嘆きなのである。

